

かみうたゆらい
神歌由来

神野麻郎

私はいつも帰ってくる。

身を清めた白装束の女たちが丘に登り、窟屋の前で火を焚き、神酒と供物をささげ、陣を組み、身を震わせながら歌をうたう、そのときに私は帰ってくる。

火と歌は私を呼び寄せ、私が何ものであるかを私に思い起こさせ、時を始めに返す。私は、虚空で雲気が集まるように自分の身体を取りもどし、生きる、マシラとともに。

おやがみ
祖神よ、末勝る島の神よ

祖神よ、末勝る島の神よ

円陣を組んだ神女たちは一節ごとにそう私を囃しながら、長い時間をかけて私のモノガタリをうたい進む。

ああ、かつて私はどのように生き、どのように死んだのだったか。

くり返される波のような調べの中を言葉がうねり、私は私自身を生き直す。神女たちもうたいながらあるいは私となり、あるいはマシラとなって、途中で泣き、笑い、また泣く。

私とマシラは後になり先になって彼女らの頭上を、島の空を、高く低く二頭の龍のように旋回する。

始めのことは知らぬ。誰も知らぬ。

なにか
地震が震る。岩が落ち、島が崩れる。

不吉に海が後ずさりし、それから急に盛り上がる。東の方の海の波が島を越えて西の方の海に打ち越し、西の方の海の波が島を越えて東の方の海に打ち越す。ヒトがさらわれる、家が、森が流される。残ったものは何もない。

その後長い時が過ぎて、私は生まれたらしい。母は知らぬ。父も知らぬ。しいて言えば、天と島とが落雷のように交わり、私は成ったのだろう。

私の身体は獅子ほども大きい。全身に黒い毛を生やし、ただ左肩から右の脇腹にかけて

は、何の痕跡か、金の毛を稲妻のように流している。立って歩くが、四肢で蹴って走る。五感は鋭く、頭もよく働き、目は怒ると熟れたほおずきのように燃える。この私はヒトか？ヒトならぬ。ケモノか？ケモノならぬ。私はヒトでもケモノでもない何ものかだ。

私は草木や鳥獣のもの言う声がわかる。同じようにヒトの言葉も聴き取れる。だが私には、ヒトのように言葉を弄んで昨日を煩うということはない。明日を思い悩むということもない。ただ、今という時があるだけだ。そして世界は私の周りに、私の五感が感知する分だけある。私はケモノのように、今、ここを生きるものだ。

荒々しい血が身体を駆けめぐる。すると私は、風を巻きながら夜の森を疾駆する。浜辺をしぶきを蹴立てて走り、また森に入って丘を駆け登る。私を止めるものは何もない。四つ足のものや鳥たちは私の気配を感じると急いで逃げ、木や草でさえ後ずさりして道を空ける。私はこの島の王だ。夜々森でケモノや鳥を斃し、その肉をすする、猛々しいものだ。

夜明けごろ、丘の上で私は吼える。空の果て、遠い海の奥に向かって吼える。そこには私のなつかしい者たち、親たちがいるのか。私のふるさとはどこにあるのか。だが空も海も、何も答えぬ。私は一人だ。私はたった一人、この島に遅れて生まれてきてしまった無用のものかもしれぬ。吼え疲れ、窟屋に入って眠る。

島は雨の多い暑い季節が長く続く。そのうちに空の色が薄まり、西や北からの乾いた風が吹きまसारうになると島は冷える。

暑い季節と冷たい季節とが幾たびか巡る。

ある年の暑い季節のある日、一日中大嵐が吹き荒れることがあった。風は森の木々を吹き倒し、雨は川を溢れさせた。

その後、北の浜に船の破片や船荷が流れ着いた。ヒトの屍もある。次の日、毀れた小舟が流れ寄った。中に一人、若い女が伏している。鼻に顔を寄せるとまだ細い息がある。乱れた黒髪を分けると、ただ眠っているだけのような顔は美しい。私は冷えた女の身体を抱き上げ、森の中を歩き、丘に運び上げる。窟屋の中に寝かせ、ふしぎな人形のように見守る。

雷鳴がとどろき、稲妻が空を切り裂いている。帆柱が崩れ落ちる。船は傾いで波の山の上に持ち上げられ、次には波の谷の底に突き落とされる。船の中に悲鳴が満ちる。私は祈る。ただ神に祈るしかない。

ついに船は真つ二つに割かれ、気づくと身体は海中に落ちこんでいる。もがく。息がで
きぬ。死ぬのか、私はこの海で死ぬ運命だったのか。親兄弟たちの顔が浮かぶ。かろうじ
て海面に浮かびあがる。ただ叫び祈る。すると暗い空に何かの姿が閃く。翁のようだ。あ
れはたまに私の夢の中にやって来る白鬚しろひげの翁だ。何かが身体に当る。そのものに必死で取
りつく。後はおぼえぬ。

闇がほどけてゆく。しかしまた青白い闇。まだ夢の中だとわかる。

私を見つめる男の鋭い目。毛だらけの身体。恐ろしいものか。私は喰われるのか。だが、
男は両手でたどたどしく私の口に水を含ませてくれる。うまい。何度もこうしてこの男に
水を吞ませてもらったような気がする。ここはどこ？こつこつした岩壁。岩の天井、青白
い闇。

また眠りに落ちる。夢とうつつのあわいがさだかならぬ。馬にまたがった白鬚の翁がま
たやって来て私の名を呼ぶ。「マシラ、マシラ」。そして命ずる。「マシラよ、生きよ！生き
よ！」。そう聞こえたと思えば、もう姿はない。

また岩壁、青白い闇。男がそばで音立てて何かの肉を食り食っている。私はまだ喰われ
てはおらぬ。嵐の海で溺れ死にもしなかったらしい。指が、手が動く。おずおずと手を伸
ばして、初めて男の身体にさわる。驚いて男は飛びすさる。そして近づき、私に顔を寄せ
てくる。男の顔や金色の肩をゆっくりなでる。なぜだかどめどなく涙が流れる。男はまた
水をくれる。そばにある肉の残りも私に促す。

次に目覚めると、何とか身を起こすことができた。どこに行ったか、男はおらぬ。壁に
手をつき、やつと立ちあがる。ゆっくり歩いてみる。閉ざされたここは、どうやらどこか
の窟屋の中らしい。それにしてもこの海底うみぞこのような青白い闇は。

岩壁に一つある裂け目のあたりが白んでいる。そこを抜け、こわごわと初めて外に出て
みる。たちまち目が痛む、七色の光が瞼の内側で踊る。ゆっくり薄目を開く。しだいにも
ののかたちがさだまってゆく。

夜明けらしい。遠くの雲が燃えている。青黒い海、水色の礁湖イソ、目の下に広がる緑の森。
私は一人、丘の上に立っている。

かすみがかった頭が少しずつ晴れてくる。足もとから崖がなだれ落ちている。どうやっ
て私はここまで登って来たのか。そのときから幾日が経ったのか。ここはどこで、あの男
は誰なのか。

少し離れた所に水音がする。上の方から幾筋か水が流れ落ちている。両手で受けて口に含む。うまい。ああこれは、男が何度も与えてくれた甘い水だ。ああ、私のこの汚れた裸の身体は。私は恥じる。水で拭い、あたりのこのカズラで覆う。

日が登って海や干瀬ひしが明るむ。目の下の森に写った影がしだいに払われてゆく。でも北に向いているらしいこの岩場には、日の光は少しも届かぬ。見も知らぬ景色に、心が沈んでゆく。ここはいったいどこなのか。昔話に出てくるような、世の果ての鬼ヶ島に私は来てしまったのか。母や父は、兄弟は。声が出て涙があふれる。

獲物を銜えて崖を登ると、窟屋の前に女が立っている。私を見て驚くが、怖れはせぬ。涙を拭いながら、あえて笑みを作ろうとする。長い髪を後ろに結び、身にカズラをまといつけている。明るみの中に立つ女を初めて見る。中背の美しい女だ。私は女を促す。女のクボのようなかたちの岩の裂け目から窟屋に入り、ともに獲物の肉を食う。

女は涙を見せながらも、切れ切れに話しかけてくる。自分はマシラという名でY島の者だ、S島に行く旅の途中で遭難した、Y島で父は部落の長、母は神を祀る司つかさだ、と言う。そして私に名を問う。名のない者だ、と私は答える。ここは何という島か。名のない島だ。近くにほかの島があるか。ない。この島にほかにヒトは住んでいるのか。見たことはない、いるのはケモノだけだ。おまえに親兄弟はおらぬのか。おらぬ、もともと知らぬ。

マシラといった女はその日一日中、ぐずぐずと泣きとおす。私は放っておくしかない。しかし次の日になると、マシラは心に決めたようにもう涙を見せず、窟屋の近くで少しずつ動きはじめた。木や草を集めてくる。木の蔓を石で叩いてほぐし、皮を剥いで編んで身にまとう。器用に草履も作る。その次の日には窟屋のそばに石で囲って祭壇を作り、手を合わせて祈る。

マシラはよく考え、よく動き、そして私には笑顔を見せる。これは智慧深く、心やさしく、そして神に近い女だとわかる。私は嬉しくなる。マシラを見てみると波立つ心が静まるようだ。どうかすると、自分の顔にも慣らわぬ笑いが浮かんでくる。だがしだいに、女の胸の隆起や脚の白さが私を落ち着かせなくする。

私は夜、崖を走り下って森の中をうろつく。猪が走る、雉が飛び立つ、兎が逃げる。捕えてかぶりつき、裂いて肉をすすする。森の中や浜辺を風を巻いて走る。身体に力がみなぎる。そうして駆けていても女の姿が頭から離れぬ。もう私は一人ではないのだ。道のそば

の小川はうたい、木や草も笑っている。獲物を銜え、夜明け近くに窟屋に戻る。

何日目かの夜明け方に、窟屋の中でまた血のしたたる肉をとみにすすった後、私は女に近づく。女も拒まぬ。抱いて横たえる。青白い闇に二人の荒い息が響く。精を放った後、私は窟屋の外に出て北の空に向かって吼える。星が消え、雲が焼けている。

また昼と夜とが幾たびか巡る。

ある月の明るい夜に、私が崖を下りていこうとすると、マシラが私も連れていけと言う。私はマシラを背負い、ゆっくり崖を下る。小川に沿って走り、北の浜に出る。東の空に満月がかかり、礁湖イクイもその向こうの海も薄く輝いている。マシラは喜び、水に入り、子供のように戯れる。私も海に躍りこみ、マシラを抱き上げる。マシラはこの島に来て初めて心の底から笑う。

その次の日から、マシラは昼間、一人で崖を下りるようになる。森で木の実や草を集める。北の浜にも出て礁湖で貝や藻を漁る。

やがてマシラは丘の岩場で、石を打ち合わせて火を起こす。それから私が運んでくる獲物は火で焼かれるようになる。焼けた肉を食い、窟屋の青白い闇の中でマシラと交わり、マシラのそばで休む。

また暑い季節と冷たい季節とが幾たびか交代した。

その間に、西の方の入江に男が二人小舟で流れ寄り、近くに小屋掛けた。男たちは釣りや網で魚を獲りながら、島を探ってまわる。私はものかげからそれを見ている。

ある時二人の姿は消えたが、半月が太って満ち、欠けてまた半月になるころ、今度は数艘の小舟でやって来た。西の入江の近くの木々が斧で伐り払われ、いくつかの家が建ち、小さな部落になる。そこには女子供の姿も見える。犬や豚や山羊もいる。周囲に粟や野菜の畑が開かれる。彼らは魚介や海藻を漁り、弓矢や槍で狩りをする。

私はたまに西の方に出かけて、ものかげから彼らのようすを探る。彼らははじめ、私を知らぬ。だが、小舟で磯辺を廻り、森の中を歩く彼らは、やがてマシラが丘の上で焚く火の煙を見、私の遠吠えを聞きつける。どこかで私の姿もかいま見た彼らは、私を「金くがねのイナヅマ」と呼んで恐れるようになる。私もマシラに、彼らに用心せよ、西の方には行つてはならぬと告げる。

そのうちにまた数艘の舟が家畜や道具を積んでやって来て、部落はにぎやかになる。弓

矢で狩りをする男たちも増え、森の中の四つ足や雉はしだいに減っていく。私は東の方の森に遠出して獲物を追うことが多くなる。だが私の遠吠えを怖れ、丘や丘の近くの森には彼らはやって来ぬ。

しかしある日、マシラが森の中で狩りの男どもに出くわし、獲物のように追われ、ようやく逃れた。そしてまたの日、私が北の森を歩いていると、一本、また一本と矢が飛んできてそばの木や土に突き刺さった。途端に私は躍り上がって怒り、すぐさま駆けて狩りの男どもに飛びかかり、斃す。彼らの連れている犬がかかってくるが、それらも蹴散らす。

私はなおも怒りが収まらず、そのまま西に走って彼らの部落を襲う。畑を荒らし、家畜に噛みつき、井戸にものを投げ入れる。猛々しい私のふるまいに女子供は逃げまどう。犬どもも尾を垂れて遠巻きにしている。

しかし、小屋のかけから一匹の獅子ほども大きな赤犬が飛び出してきてかかってくる。私はどうと後ろに倒される。立ち上がってにらみ合い、唸り合う。赤犬は首から太い紐を引きずっている。そのうちに男どもが得物を手にして集まってくる。私はひとまず逃げる。

だが次の日、犬を連れ、手に手に得物を持った男どもが丘の崖の下まで押しかけてきた。得物を構え、上に向けて口々に、「金のイナヅマ」よ、下りて来い、下りて来い、と怒鳴る。上からそれを眺め下ろし、私は闘うしかないことを知る。行くな、止めよ、殺すな。後からマシラが私に叫ぶ。

私はマシラを窟屋の中に隠し、崖の上から吼えて威嚇する。男どもや犬どもは崖の下でためらう。だがあの獅子ほども大きな赤犬が、ひとり崖を駆け上がって来る。岩場で向き合い、また唸り合う。こいつは大きく獰猛で、死を恐れぬ奴だ、私と同類の奴だ、とわかれる。だが私とは一つ違う。いくら獰猛でも、こいつはヒトどもに飼い馴らされている。吠え合い、空中でぶつかり、互いに噛み合う。私は赤犬の腿に噛みつき、赤犬は私の脚に喰いつく。血が飛び散るが、勝負はななかつかぬ。

そのうちに男どもも登って来る。斧を振り上げ、槍で刺そうとする。私は男どもに次々に飛びかかり、噛みつき、骨を砕く。最後に赤犬の喉に噛みついて喰いちぎると、赤犬はヒイヒイと鳴いて空を仰ぎ、急に力が抜けて倒れた。それを見た男どもは、崖を転げ落ちるように逃げ去る。私はあたりに横たわっている男や赤犬の身体を崖の下に投げ棄てる。

泣き声が聞こえる。マシラが窟屋の前で膝をついている。怖い思いをさせたのか。私はあちこち破られた身体を引きずりながら近づき、なだめにかかる。だが、違うのだ、そう

ではないのだ。マシラは、他の者の命をためらわずに奪う私の性が悲しいのだと言う。殺せば恨みを買う、恨みを買えばいつか殺される、頼むからもう男たちとは争うな、部落の方にはけっして行くな。

しかしマシラよ、私にどうしろというのか。私は私となつてからずっと、他と鬪い、私自身を生きたことしか知らぬ。

その鬪いの後、部落の男どもはもう丘にも北の浜にも近づいてこなくなった。まれに森で姿を見かけてもこそそこそと逃げ去って行く。

祭壇でのマシラの祈りが長くなる。供物をささげ、まず私のことを祈る。それから島や世の無事を祈る。きれいなよく通る声で唱える調子は、かきくどくようにも、うたつていくようにも聞こえる。生まれ島で司の家系だったというマシラは、もともと神に近い女なのだ。祈りは天にも通じるのか、マシラが祈ると吹きつる風が止むようだ、乾いた空に雲が湧くようだ。

冷たい季節が去って雨が多くなり、また暑さが戻ってくる。森の獲物が少し増える。マシラに止められて、私はもう部落の方へは行かず、北や東の森や浜をうろつく。

ある昼間、西の空のようすがおかしいとマシラが私を揺り起こす。見ると西の方の部落のあたりで二筋三筋、太い灰色の煙が立っている。私は急いで崖を下って向かう。

部落では家が燃えている。そばで異様な身なりの見知らぬ男どもが刀を振りかざしてヒトビトを追いまわしている。部落の大人も子供も逃げまどい、血を流して倒れている男や女もいる。

私はすぐにその男どもに次々に飛びかかり、斃す。だが後ろから背中をやられる。振りかえって躍り上がり、その男の顔を裂く。他の男どもも逃げる。私は追いかけて噛みつくが、また刀で斬られる。最後に浜の方に逃げる首領らしい男を、ようやく水際で斃す。そこで私も力尽き、そのまま浜にどうと倒れる。手足が痺れたようになって、動けぬ。目の中で、浜の先の方に停まった見知らぬ大船の姿が揺らぐ。

ヒトビトがやってきて遠巻きにして何か喋っている。そのうちマシラが泣き叫んで走り寄ってくる……。

気づくと、私は窟屋の中で横たわっている。外でマシラのかきくどくような祈りの声が激しい。中に入ってきたマシラは涙を流しながら笑い、私の顔をなでる。私はなおしばらく首も起こせぬ。

ようやく起き上がったその朝、崖の下で聞きなれぬ太鼓の音がひとしきり響く。マシラが行ってみるとヒトの姿はなく、ただ岩の上に籠が一つ置かれている。マシラはそれを運んできて、これは部落のヒトたちの礼物だと言う。中には肉や魚や芋が入っている。

それ以来また、たまに近くの森の中や北の浜で部落のヒトたちを見かけるようになる。私に出くわすと彼らは相変わらず恐れて逃げるが、マシラを見ると笑って頭を下げてくる。

マシラはそのうち、彼らと言葉を交わすようになった。そしてマシラは私に告げる、部落のヒトたちは海賊を退治してくれた私をこの島の守り神として崇め、供物をささげる、皆はもう私を「金のイナヅマ」ではなく神と、「窟屋の大神」と呼んでいると。おまえは生きながらに神になったとマシラは笑う。しかしすぐ悲しげな顔をする。余儀なかったとはいえ、またおまえはヒトをたくさん殺めてしまったと。神祀りにいよいよ熱がこもる。

時々崖の下から太鼓の合図の音が聞こえてくるようになる。

あるとき、籠の中にたくさん粟粒が入っていた。マシラはそれを口に入れて噛み、土の甕に吐き入れる。根気よく、噛んでは吐き入れる。幾日か寝かせると、それはどろどろの酒になった。

マシラはその粟神酒を窟屋の前でまず神にささげ、島の豊穰を祈る。私はマシラの後ろで神酒を食らう。しだいに身体が熱く、手足が軽くなり、やがて思いもよらず私は、笑いながら木の棒を打ち鳴らし、岩場で跳びはねる。それを見たマシラも笑いながら踊り、よく通る声で調子よくうたう。そのときが島の、今に続く粟神酒の祭りの始めとなった。

ある満天の星の夜、丘の真上で星が明るく長い尾を引いて消えた。それからしばらくして、マシラの腹が少し太ってくる。マシラはやさしい目をして腹をなでる。私も喜ぶ。二人だけのおだやかな日々が続く。もう部落の男たちと闘うこともない。

けれども、それで私がおとなしくなったわけではない。荒々しい血はまた時々騒いで私を駆り立てる。ケモノや鳥を襲い、骨を砕き、肉をすする。風を巻いて森や浜辺を疾駆する。夜明け方、丘の上で一人吼え続けてヒトを、ケモノや鳥を脅かす。

どう言われようとどう怖れられようと、私は「大神」などではない。以前に変わらぬ、母も父も知らぬ、ヒトならぬ何ものかだ。一人遅れて生まれてきてしまった、無用のものだ。

雨が通った後に、大蛇のような虹がかかる。

島が激しく揺れる。揺れながら沈んでゆく。

不吉な夢だ。

窟屋の外で、いつものように大神が吼えている。その声はどうかすると、悲しげに尾を引く。

神に祈る。でもどうしたことか、あの白鬚の翁はこのごろ夢にもうつつにも現れてくれぬ。

ある昼間に、北の浜の干瀬で藻を漁っていると常ならぬ気配を感じた。磯の岩陰から不意に男が姿を現す。見知らぬ若者だ。男はまっすぐに近づいてくる。私は身構える。

遠くからずっと私を見ていたのか、男は褐色の顔に白い歯を見せて笑いかけながら目の前に立ち、

——俺はイシマというO島の漁師だ。三日前、漁をしていて大風に遭った。そしてここまで流されてしまった。

と言う。そして、

——おまえは何者だ、名は何という。

と訊く。答えると、

——ああ、やっぱりおまえがマシラなのか。会いたかったぞ。なるほど美しいな。

と笑う。私のことはもう西の方の部落で聞いてきたと言う。私は問う。

——おまえはここで何をしている。

——厚い胸板に秀でた目鼻立ちの若者は、やはり白い歯を見せて、

——壊れた自分の舟を直さねばならぬ。だからしばらくここにいます。

私は声を荒げて、

——ここはだめだ、早くまた部落の方に行け。ここにいて見つければおまえは殺される。

この島には強くて恐ろしいものがある。

——それは「金のイナヅマ」、いや、「窟屋の大神」のことか。部落の者たちは恐れているが、そんなものを俺は恐れぬ。それよりも、どうしておまえはその、大神とやらというしよにいるのだ。いつからそうなのだ。話によれば大神はケモノのような奴だということではないか。おまえは大神に捕まっているのだろう。逃げられぬのだろう。そのうちに喰われてしまうかも知れぬぞ。この俺が助け出してやろう。望むなら、おまえをおまえの生まれ島に送ってやる。

——違う、違う！おまえは何も知らぬ、何もわかっておらぬ。おまえが私に近づくな、かならず大神に殺されよう。私にけっしてかまうな。早くここを立ち去れ！

若者は黙って私の身体を眺めまわす。私は自分の身なりを恥じる。そして、恥じてしまったことにとまどう。若者は智恵深そうな目を光らせた後、

——わかった。おまえがそれほど言うなら立ち去ろう。しかし舟は漁師の俺にとって命の次に大事なものだ。捨ててはいかれぬ。できるだけ早く直してこの島を離れよう。しかしマシラよ、そのためにもどうか、それまで俺を助けてくれぬか。俺が殺されぬように、俺に大神のことをもっと教えてくれ。

私は窟屋に帰っても男のことは口にせず、狩りに出ようとする大神に、今夜は北の方角は不吉だから行くな、とだけ言う。大神は鋭い目で私をまじまじと見つめる。

女を見、女と話しているうちに俺の心は決まった。

磯の洞窟に隠れて寝ころびながら、考える。どうすれば奴を斃せるのか、今までになかったほど頭をしぼる。それにしても、やはり俺は運の強い男だったのだ。こうしてあのマシラという女に出会えたのだから。大風に吹き流されてこの島に漂い着いたことを、昨日までは不運だとばかり嘆いていた。しかしきつとそれも、こうしてマシラに会わせようとの神のはからいだったに違いない。あの女を、どうにも手に入れたいではおかぬ。

夜明けごろ、かすかに遠吠えが聞こえてくる。丘の上で大神が吠えているのか。日が高く昇ってから森の中に入り、女の話していた川沿いのケモノ道を見つける。そこをたどって、用心深く丘に近づき、崖の下からようすを探る。この上に二人はいるのだ。

それから、また西の部落に行く。男たちに会い、借りは働いて返すからと、古い漁網をゆずってもらう。槍と斧を借りる。おまえは何の猟をするのだ、どこに小屋を作るのか、と男たちは訊く。しかし北の浜だけはやめておけ。あそこは窟屋の大神の領分だからな。

多少の食べ物も分けてもらい、北の浜に取って返す。夜になって、浜から眺めていると丘の上が少し明るんでいる。マシラが火を焚いているようだ。何か祈っているのか。

夜中に目を覚ます。森の中に入り、月の光をたよりにケモノ道をたどる。丘の少し手前の、昼間目をつけておいたガジュマルの大木に登って夜明けを待つ。木の股の上で、窟屋に寝ているはずのマシラのことを思う。今すぐにも崖を登って行きたい。いやしかし、それは危うい。

ふしぎな女だ。干瀬で漁る姿を一目見て、俺はたちまち惹きつけられてしまった。そしてマシラへのこの思いは、一昨日よりは昨日、昨日よりも今日の方がよけいにまさっている。部落の者たちの話に、初めは興味半分だったが、面と向かって話しているとこの女こそ俺のずっと求めていた女だとすぐにわかった。粗末な身なりだが、姿は輝き、智慧のある深い目をしていた。

大神を斃し、マシラを手に入れた後のことを考える。西の方の部落でもよいが、この北の浜の近くに家を建てて二人だけでいっしょに暮らしてもよい。俺は腕のよい漁師だ、狩りも達者にできる。マシラを飢えさせはせぬ。二人で暮らして子供をたくさん作ろう。いや、そうだな、マシラを〇島に連れ帰ってもよい。マシラなら親兄弟たちも喜んで迎えてくれるだろう。それとも、マシラが望むなら、マシラの生まれ島に行つて暮らしてもよい。

木の上でまどろみかけたころ、さくさくと落ち葉を踏む音が近づいてくる。まばらに落ちる月の光の中に、そのものは姿を現す。黒っぽい、獅子ほども大きなものだ。口に何かの獲物を銜えている。だが大木の真下で急に立ち止まった。立ち上がり、鼻を突き出し、においを嗅ぎまわっている。一瞬、息が止まり、身体が固まる。しかしやがて黒いものは小走りに丘の方へと消えていった。木の上で深いため息をつく。焦った。身体じゅうが汗ばんでいる。だがともかくも見届けた。これでよい。

また昼間、浜辺の洞窟で、槍と斧と古い漁網を整える。そしてまた森に入り、ガジュマルの大木の上にそれらを運び上げて隠しておく。日暮れごろ、また丘に火を見る。今夜もそろそろ奴は狩りに出かけるはずだ。少し休んでおこう。だが目の前に、未明に見た黒い姿がふくれあがる。立ち上がった時にちらつと閃いた、金のイナヅマのしるし。あれは、あるいは強敵かもしれぬ。身震いが起こってしばらく寝つかれぬ。

また夜中、森に入り、木の上から網を下ろして道に仕掛けておく。そして木に登り、道の真上に張り出した太い枝の股に潜んで待つ。今夜も地面に月の光が洩れ落ちている。仰ぐと枝葉の間に見える少し欠けた月は、血の色を帯びている。

それにしても、どうしたことだ、この身の震えは。昨夜のようにマシラを得た後のことを楽しく思おうとする。しかし、ならぬ。どうしてしまったのだ、この俺は。

今までこんなことはなかった。生まれ島の部落で、俺は長じてからは舟漕ぎでも相撲でも誰にも引けを取らなかった。狩りをし、漁をしても勇敢だった。皆から讃えられ、仲間たちも女たちも近寄ってきた。得意だった。この世は自分のためにこそあるのだと思つて

いた。

だが、どうしたことだ、この身の震えは。あの恐ろしい奴に、俺はかなわぬというのか。ああ、あの女、マシラよ。

東の森まで遠出して獲物を探す。だが今夜は何も獲れぬ。空しく戻る。丘の上が朱い。マシラはまだ火を焚いて神を祀っているのか。

出てくるとき、珍しく、今日行くな、とマシラは止めた。今日だけは行くな、火にしるしが出ている。禍々しいことが起こる。私のために、この子のために、行くな、と腹を押さえた。

いつもの川沿いの道に戻る。だが今夜は静かすぎる。ふだんはにぎやかな小川がうたわぬ。ふだんはひれ伏して道を空ける木や草もよそよそしい。

急に何かにつかり、前につんのめる。何だ、どうした？腕が、足が動かぬ。これは網だ。網はさらに上からも降ってくる。誰だ？絡められ、もがく。

背中に鋭い痛みが走る。肩からも血が吹き出る。槍だ。私は唸り、網目の間から上をにらみつける。樹上に黒いものが動いている。

私は吼えて立ち上がる。網をかぶったまま、木に体当たりをする。ゆさゆさと枝が揺れる。

と、真上から黒いものが落ちてくる。片腕を振ってそれを払ったとき、眉間に火が走る。傾いて倒れながら、ヒトが物のように飛んで行くのが目のはしに映る。そいつは木の根元にぶつかり、倒れた。

わずかな月の光が血に濡れる男の顔を浮かばせる。あれは誰だ。部落の男か？見知らぬ奴だ。

静かだ。それにしてももう天が白んでくるはずなのに、あたりは暗いままだ。にわかには雷鳴がして稲妻が光る。森が騒ぎ出す。

だが音も光も、しだいに遠ざかっていく。小刻みに身体が震える。

二度、三度と、丘の下の方で大神の吼える声が聞こえたような気がする。その後は恐ろしい沈黙だ。やがて空がかき曇り、雷鳴がとどろき、驟雨が来て祭壇の火がかき消された。

大神の身の上に何かが起こったのだ、探しに行かなければ。崖をすべり落ちる。濡れた草

の上にとっと倒れる。

気づくと、夜が明けている。しかし、いくらか弱まったものの、風雨は陰気にまだ続いている。立ち上がり、大神を探す。

大木の下に男が倒れている。あの若者らしい。あの若者がどうしてここにいるのだ？少し離れたところに、網に絡まり、槍を背中に突き立ててうずくまっているものがある。大神だ！叫んで走り寄り、頭を抱き起こす。

額が無残に割られている。黒や金の毛がしとどに血に濡れている。すでに身体に力が無い。

かすかに呻き声を洩らす。おまえ！声の限りに呼ぶ。おまえ！おまえ！行くな！行くな！そちらの方に行つてはならぬ！

赤い目が私を見つめる。私の目だけを捉えようとする。だが、瞳はしだいに光を消してゆく。ありえぬことに、息も絶えてしまった。

後ろで私を呼ぶ声がある。男が立っている。全身ぐっしりと濡れ、裂けた頬から血を流し、片足を引きずっている。すぐさま男に飛びかかる。たやすく男は後ろに倒れる。男の身体の上に乗って叩きながら叫ぶ。

——おまえは私をたばかったな！どうしてだ、どうしておまえは私の夫を殺めたのだ！

男は私の腕を押さえて、マシラ、マシラと怒鳴る。しかし声はかすれ、上ずっている。

——聞け！マシラよ。おまえは夫だと言うが、大神はヒトではない、ケモノだったではないか。目を覚ませ、マシラよ。お前はケモノに捕まっていたのだ。俺は命がけで、そのケモノからおまえを救い出してやったのだ！

私は首を振り、なおも男にかかつていく。

——いや、そうではない！ただのヒトにすぎぬおまえは、何もわかつておらぬ。ヒトには大神のことはわからぬ！大神は私の命を救ってくれた。私をいつくしんでくれた。西の部落のヒトビトも救った。おまえは間違った。神に背くふるまいをした！

泣きながら大神を葬る。異変を知つてやつてきた部落の男たちが、しばらくの相談の後、あたりの木の枝を払って組合せ、その上に大神の骸を乗せて大事そうに北の浜まで運ぶ。海べりの崖下の岩に囲われた場所にそっと横たえる。骸の上に葉のついた枝を積み上げる。たちまちできたその葬所に、また部落から女や老人や子供たちがぞろぞろと吊いに来る。

みな骸に向かって手を合わせながら、一様に不安な顔つきをしている。島を領した大神が逝き、これから自分たちの身の上に何が起こるか知れぬのだ。恐ろしいものをよく斃してくれたと、他郷から来た、傷ついた若者を讃える者は誰もおらぬ。信心深い女たちは泣き崩れ、怖れ、私を慰める。私はそこらなかなか立ち去れぬ。

丘に登り、祭壇に火を焚き、大神を送る。名残りを告げるようにしばらく丘の上を漂っていた大神の霊が、ゆっくり島を離れて行く。

大神の霊は、目には見えぬ光に導かれて夜の海を飛び、東の方はあるかの彼方にあるという「光の島」へと去って行くのだ。そこにはきつと大神の親たちも待っているだろう。大神はただ死んだのでなく、なつかしい者たちのもとへ戻って行くのだ。けれども、私の涙はいつまでも止まらぬ。

片頬の裂けたイシマがそばで口を開く。

——わかっただろう？やはりケモノだったではないか。

私は力なく言い返す。

——いや、違う。ヒトにはわからぬ。始めから大神はこの島にいた。大神は島の根だったのだ。島の根が失ければ島は荒れる。これから島には災厄が続くだろう。

——マシラよ、おまえを見ていると俺もつらくなる。おまえの言うように俺は間違ったのかもしれぬ。してはならぬことをしてしまったのかもしれない。だがこれも天のさだめなのだ。マシラよ、大神はもうおらぬぞ。もう帰らぬぞ。これからはこの俺を見よ。俺だけを見よ。俺は神の導きでおまえに会うためにこの島にやって来たのだ。信じよ。これからは俺といっしょに暮らせ。

——ならぬ。私は大神の妻だ。死ぬまで大神の妻だ。おまえの妻などにはならぬ。それに私は、もう大神の子をみごもっている。

イシマはしばらく黙った後で言う。

——よい、そうならばそれでよい。マシラよ、おまえはその子を産め。元気な子を産め。お前の子なら俺の子だ。島の根が失せたというなら、二人でまた島の根を立て直そう。おまえと俺ならかならずやれる。

マシラが祭りをして私を呼べば、私はいつでも島に帰る。

祭りで私を呼び、私を語るマシラの声はしだいに調べを帯び、長い歌となる。歌を聞き

ながら私は、マシラを、子孫たちを、島を見守る。

だが、私の本性は死んでも変わらぬのだ。もしヒトビトが島を荒らし、私の祀りを怠るなら、私は暴れてヒトビトを害するだろう。わが子孫よ、島のヒトビトよ、いつまでも私を怖れよ、崇めよ。

もう私に時というものはないが、ヒトビトは島で歳を重ねてゆく。

私を斃した後、イシマは北の浜の近くに小屋を建て、強くマシラをいざなった。しかしマシラは決して窟屋から離れようとはしなかった。そして、身は痩せても日々太っていく腹を抱えながら、毎日私のいる岩場に通って来て供物をそなえ、祈った。マシラを慕う若い女も二人、三人と部落から通ってきて、神祭りを習い、マシラを助けるようになった。イシマも毎日マシラを訪ねてきて、何くれと世話を焼いた。やがて月満ちてマシラは女の子を生み落とし、窟屋で育てはじめた。その子はオモと名づけられた。

二年ほど経って小さなオモが走り出したころ、マシラはようやくオモを連れて丘を降り、まっすぐイシマの小屋に向かった。イシマは顔を輝かせて迎え入れた。

以来マシラは寝る間も惜しんで畑の耕作や子育てに励み、また神々をよく祀った。イシマも腕のよい漁師で、家族を養い、大きな家を建てた。夫婦の間には次々に七人の子が生まれたが、そのうち二人は幼くして死に、二人は森の中に迷い入ってふたたび帰らぬ、神の誘い子だった。

オモが五つになったころ、遠くの島から漁師の兄弟が小舟で北の浜にやって来た。男たちはイシマと話し、住める島であるのをたしかめると、いったん取って返し、二艘の舟で家族と物を積んでまたやって来て、イシマとマシラの家の際に家を建てて住んだ。

そのうちに西の部落から移り住んでくる者たちもあった。その後もぼつぼつと島に流れ着いたり、遠くの島からわざわざやって来たりする者たちがいて、北も一つの部落らしくなった。部落のヒトたちはイシマとマシラの家を、敬って島の根の家と呼んだ。

年ごろになったオモは、西の部落の男と契り、やがて母となった。オモはマシラに似て美しかったが、生肉を好むのと毛深いのを終生の悩みとした。オモの生んだ子供たちの中にも、神の誘い子が二人あった。子供たちが育つにつれ、オモはマシラに仕えて神祀りをよくした。

勇敢で智恵もあるイシマは、長年、部落の長、島の親としてよく皆を率いた。片頬に残る深い傷痕は、かえって長としての威厳を増した。

イシマは壮年の日、部落に襲来した手強い海賊たちを首尾よく追い払った。老人や女子供をいちはやく森に逃がし、目ぼしい家財も隠しておき、自らは男たちを率いて夜襲をかけ、果敢に闘った。それはイシマの親の武勇談として、歌にもうたわれるようになった。年を経てイシマはおだやかな長老となったが、しかしある日、庭で石に坐って幼い孫たちの遊びを見ていたとき、ふつとり口をきかなくなった。部落の者たちは、イシマの親は魂をどこかに落としてきてしまったのだろうとうわさしあつた。いや、あれは窟屋の大神の祟りなのだと言う者もあつた。

マシラは島の根の家の親として、神々を祀る大司つかさとして、終生皆に敬われ頼りにされた。年に十度もある島の祭りのとき、大司はオモをはじめ部落の神女たちを率いて深い森に入り、崖をよじ登って窟屋に到る。島いちばんの聖所となった「大神の窟屋」には、男たちはむろんのこと、女たちの中でも身を清めた神女たちしか入ってはならぬ。

夜を待つて神女たちは窟屋の前の祭壇で火を焚き、神酒と供物をそなえ、それから私の歌をうたう。それは部落の男たちは知らぬ、神女たちしか知らぬ、長い長い秘密の神歌だ。かみうた

祖神よ、末勝る島の神よ

祖神よ、末勝る島の神よ

歌はおもむろに低い調子で始まり、やがて上げ潮のように高まる。くり返す波のような調べの中を、私のモノガタリがうねっていく。

東の海の波が西の海に打ち越し、西の海の波が東の海に打ち越す、

天と島とが落雷のように交わった後、大神が生まれる、

獅子ほどの大きな身体の、黒毛に金の稲妻を走らす大神は、怒ると目がほおずきのよ
うに燃える、

大神は夜の森を疾風はやてのように駆け、ケモノや雉ほふを屠り、丘の上で悲しく吼える、

大嵐の後、島に小舟でマシラが流れ着き、大神が救ける、

大神とマシラは丘の窟屋で暮らし、月夜の浜辺で戯れる、

大神は西の部落の男たちと闘い、獅子ほども大きな赤犬の喉を喰いちぎる、

大神は部落に寄せて来た海賊を退治し、ヒトビトは大神を怖れ崇めるようになる、
丘の真上に星が明るく流れた夜に、マシラが身ごもる、

小舟でイシマが流れ寄り、干瀬で漁りするマシラを岩陰からうかがう、

イシマは洞窟に隠れ、槍と斧を研ぎ澄ます、

月が血の色をしていた夜、斧を振りかざしたイシマが木の上から大神の上に飛びかかる、

……

この神歌をうたうとき、マシラは始めの時のようにカズラを身にまとい、杖を突いて円陣のまん中に立ち、身を震わせる。神女たちも同じようにカズラをまとい、声を合わせ、歌の中の私やマシラになり、私やマシラを生きる。そして私が斃れる最後の場面では、皆が声をあげて泣き崩れ、また讃える、

祖神よ、末勝る島の神よ

祖神よ、末勝る島の神よ

そのとき私は龍のようにその上の空を高く低く旋り、旋りながら吼える。祭りのたび、私のその声は雷鳴のように島じゆうに響きわたり、ヒトビトは恐れかしこむ。

マシラも、子や孫たちに囲まれておだやかに老いた。しかしある日、突然部落から姿を消す。もう一人で歩くのもむずかしい大司のマシラがいなくなって部落じゆうが騒ぎ、総出で近くの浜を、森を探しまわるが見つからぬ。

そのときイシマの親が何年ぶりかで口を開いて、大司はかならず大神の窟屋にいる、とつぶやいた。オモたちが駆けつけてみると、たしかに窟屋の中にマシラが横たわり、もう息絶えていた。そのとき窟屋の中は、海底のような青白い闇だった。

そのころ私は、風となったマシラと手を取り合い、海上に敷かれた光の道を、「光の島」へと向かっている。青白い光の中で、マシラはしだいに若返ってゆく。腰が伸び、髪は黒々と豊かに、顔や手はつやつやとして、初めて出会ったころのように若く美しい。

マシラよ、おまえはよく生きた、島の根を立て、島を栄えさせてくれた、マシラよ、またわれらは逢えた、これからはずっとともにいられる、泣くな、島にはまた戻れる、丘の窟屋の前で神女たちが火を焚き、私とおまえの歌をうたうそのときに。